

サバ軍曹

ある夏の日の夜、ホセと私は家を出て、涼しい戸外へ散歩に出かけようとしていた。耐えがたい炎暑の一日を過ごした後、そのひとときの砂漠はいかにもさわやかで心地よかつた。

その時刻には、近所のサハラウイはみな子供を連れて食べ物も外へ持ち出し、家の外で食事をしていた。夜はかなり更けていた。

私たちが町の外にある墓場近くまで行つた時、すぐ先の方で、月明りの中、サハラウイの若者たちがなにかを取り巻いて騒いでいるのが目に入った。人だかりのそばを通り過ぎる時、地面にスペイン人の軍人が身動きもせずうつぶせになつてゐるのに気がついた。死体かと思ったが、顔色は赤くつやつやしており、立派な髭をたくわえ、ブーツを履いていた。その軍服から、砂漠軍団のものとわかつたが、階級を識別する徽章はなかつた。

その姿のまま随分時間がたつてゐるようだつた。野次馬たちは大声でアラビア語をしゃべりながら、ふざけて唾を吐きかけたり、ブーツを引つ張つたり、手をふんづけたりしてゐた。またその中のサハラウイの一人はその軍人の軍帽までかぶつて、ピエロのように酔っぱらいの真似をしてゐた。

なんの抵抗力もない軍人に対して、サハラウイは好き放題をしてはばかりなかつた。

「ホセ、はやく車を取つて来てちょうだい」そつとホセに言うと、私は氣を張り詰めてあたりを見回していた。その時、別の軍人かそれともスペインの民間人がそこを通りますようにとどんなに願つたことか、だが近くを通る人は一人もいなかつた。

ホセが走つて車を取りに帰ると、私はその軍人が腰につけていたピストルからずつと目を離さなかつた。もしかれかがそのピストルをはずしたら、大声を上げるつもりでいたが、その次にどうしたらいいのか思いつかなかつた。

その頃スペイン領サハラの若者たちは、すでに「ポリサリオ人民解放戦線」を組織しており、本部はアルジェリアにあつたが、町のどの若者の心もほぼすべてそこに向き、スペイン人とサハラウイとの関係は非常に緊張していた。砂漠軍団とこの土地とはさらに不眞天の敵と言えた。

ホセが車をすつ飛ばして戻つて来ると、二人で人込みを押しわけ、その酔払いを車の中へ引つ張り入れようとした。だがその男は背が高くがつちりとした体格で、抱えて車まで運ぶのはおおごとだつた。二人で全身汗まみれになつて、やつと後部座席におさめると、ドアを閉め、ごめんなさいと言ひながら、ゆっくりと人込みを走り抜けた。それでもガンガンと何度も車の屋根を叩かれた。

砂漠軍団の正門に近づいたが、ホセは依然としてスピードを緩めなかつた。軍営地の周辺一帯は死のような静寂につつまれていた。

「ホセ、ライトを点滅させて、クラクションも鳴らしてちょうだい。私たち合言葉を知らないんだから、間違われるわ。離れたところで止めてね」

車は衛兵のいるところからずつと離れた所で止まつた。急いでドアを開け外に出ると、スペイン語

で大声を上げた。「酔っ払いを送つて來たわ。こつちへ来て見てちょうだい！」

衛兵が二人駆けて來ると、ガチャと銃に弾を込め、私たちに向けた。ホセも私も車を指さしたまま、身動きもしなかつた。

二人の衛兵はちらと車の中を見たが、当然知った顔だ。すぐに車に入り込み二人でその軍人を抱え出し、ぶつぶつと言つていた。「またこいつだ！」

その時、高い塀の上の探照灯がさあーっと私たちを照らした。私はその物々しい様子にすっかりおじけづき、早々に車の中へ逃げ込んだ。

発車する時、二人の衛兵は私たちに向かつて軍隊式の敬礼をして言つた。「ありがとう！ 同胞！」

家に向かう道中、私はまだ胸がどきどきしていた。あんなに近くで銃を突き付けられたことは、生まれて初めてのことだつた。あれは味方の軍隊だつたが、やはりとても緊張した。

その後何日も夜間の警戒厳重な軍營地区と、あの泥酔した軍人のことを考えていた。

それから間もなく、ホセの同僚たちが家に遊びに來た。私は彼らに歓迎の誠意を表して、冷たく冷やした牛乳を大きな壺いっぽいご馳走した。その数人は冷えた牛乳を、まるで牛が水を飲むようにあつという間に飲みほした。私は慌ててまた二パック開けた。

「サンマウ、俺たちが飲んだらきみたちどうするの？」その内の二人が情けない顔をして牛乳を眺め、それから申し訳なさそうにまた飲んだ。

「安心して飲んでちょうだい！ あなたたちふだん飲めないんだから」

食べ物は砂漠に住むだれにとつても関心のある話題だつた。招待された人はそれだけでは満足せず、その美味しいものはどこから來たのか必ず聞いた。

ホセの同僚はその日の午後わが家のありつたけの新鮮な牛乳を飲んでしまつたが、私が平然としているのを見て、果たしてその入手先を知りたがつた。

「ええ！ 買うとこがあるの」私はもつたいぶつて答えた。

「どこだい、教えてくれよ！」

「駄目、あなたたち行けないわ。飲みたかったら家にいらつしやい！」

「俺たち沢山ほしいんだ。サンマウ、お願ひだ。教えてくれよ！」

「砂漠軍団の酒保で買うの」

「軍營だつて？ 女のきみが軍營へ買物に行くのかい？」彼らは大声を上げた。なんとも間抜けな顔つき！

「軍人の家族だつて買つてるじゃないの、私も勿論行くわ」

「だがきみは軍人の家族でもない民間人だらう！」

「砂漠の民間人は都市の人とは違うわ。軍民家を分かたずよ」にこにこ笑つて答えた。

「軍人は、少しは礼儀をわきまえているかい？」

「とても礼儀正しいわ。町の一般の人たちよりずっといいわ」

「牛乳を買つてもらつて大丈夫？」

「大丈夫よ。いくつ要るのか明日メモをちょうだい！」

翌日仕事から帰ったホセから、牛乳の注文リストを渡された。そこには八人の独身の男の名前が並んでおり、各自が毎週十パックの調達を希望しており、合計八十パックだ。

私はリストを手にしたまま唇をかんだ。調子の良いことを言つたからには、八十パックの牛乳を自分で軍営へ行つて買わねばならない。実際なんとも言い出しにくい。

かくなるうえは、いつそのこと恥をかくのを一度でかたずけることにした。その八十パックという恥さらしな数を一度に買って、もう行かないのだ。その方が十パックずつ毎日買いに行くよりもだ。

翌々日、酒保へ行つて十パック詰めの牛乳の大箱をひとつ買った。人に頼んで壁際まで運んでもらうと、くるりと引っ返してまた入つて行つてまた一箱買い、また壁際へ置く。少したつと、また入つて行つて買う。このように行つたり来たり四往復すると、カウンターに立つていた雑役兵は目を回した。

「サンマウ、あと何回行つたり来たりするつもり？」

「あと四回よ。がまんしてね」

「なぜ一度に買わないの、全部牛乳かい？」

「一度に買うと規則違反になるわ。多すぎるから」なんとも恐縮して答えた。

「大丈夫だよ、すぐ運んであげよう。でも一度にこんなに沢山の牛乳をどうするの？」

「人に頼まれたの。私の分だけじゃないの」

大きな箱を八つ壁際に積み上げると、私はタクシーを呼びに行こうとした。その時そばにすつとジープが止まつた。顔を上げると、驚いたことに、運転席に座つていたその軍人は、あの日ホセと軍営

区まで送り届けた酔っ払いではないか。

その人は大柄で背が高く、元気そうで、軍服がピシリと決まつていた。ひげだらけの顔は何歳とも見分けがつかなかつたが、人を見る目付きに幾分横柄で、また過分に人を見据えるようなきらいがあつた。上着のボタンは三番めまで開いており、頭は角刈りで、グリーンの舟形の軍帽についた階級の徽章は——軍曹だつた。

私はあの晩彼のことをはつきり見ていなかつたので、極力注意して観察した。

私が何も言わないうちに、彼はジープから飛び下りると小山のような箱をひとつひとつ車へ運び上げた。牛乳が全部積み込まれたのを見ると、私はそれ以上ためらうことなく、助手席に乗り込んだ。【墓場地区に住んでいます】私は丁寧に言つた。

「あなたの家は知つてる」荒っぽい口調でそう言うと、発車させた。

途中二人ともずっと黙つていた。彼は両手でしつかりとハンドルを握り、穏やかに運転した。墓場を通り過ぎる時、私は目を遠くの風景にそらした。彼があの晩酔態を演じ、私たちに拾われた哀れな姿を思い出しては気の毒だと思ったからだ。

家の前まで行くと、彼はゆつくりとブレーキをかけた。彼が車を下りるより先、私は車を飛び下りた。軍曹にまた牛乳を運ばせては申し訳ないと思つたからだ。私は車を下りると、すぐに大声で近くで雑貨店を開いている友達のシャロンを呼んだ。

シャロンは私が呼ぶのを聞くと、すぐにサンダルをつっかけて店から飛び出して來た。顔には控え目な笑みが浮かんでいた。

シャロンはジープの前まで走って来ると、軍人が一人私のそばに立っているのに気付き、突然足を止めたが、すぐうつむいてそそくさと箱を下ろしにかかった。その表情はまるで悪魔にでも出会ったかのように見えた。

その時、私を送ってきた軍曹は、シャロンが私の手伝いをするのを見て、次には彼の小さな店に目を移しちらつと眺めた。それから突然私の方に向き直ると軽蔑したような目付きでじろりと私をにらんだ。私は彼が私の行為を誤解したに違いないと敏感に察した。まつ赤になつた私は、しどろもどろに弁解した。「この牛乳は転売するんじゃないんです。本當です！」信じてください。人に――」

軍曹はすかずかと歩いて車に乗り込むと、手をハンドルの上に置いてぱつとたたき、何か言おうとしたが何も言わず、エンジンをかけた。

我に返つた私は走つて言つた。「どうも有難うございました。軍曹！ お名前はなんと？」

彼はじろつと私を見ると、腹に据えかねるといった風に素つ気なく言つた。「サハラウイの友達なんかに、教える名前はない」

そう言うなりアクセルを踏み、猛スピードで飛び出して行つた。

私は呆然として舞い上がる砂ぼこりを眺めながら、言い様のない無念さにかられた。人に濡れ衣を着せられて、言い訳も聞いてもらえなかつた。名前を聞いても失礼にも拒絕された。

「シャロン、あなたのを知つてゐる？」振り返つてシャロンに聞いた。

「はい」小さな声が返つた。

「どうしてそんなに砂漠軍団が怖いの。あなたゲリラでもないのに？」

「そうじやないよ。あの軍曹は、俺たちサハラウイすべてを恨んでいるんだ」「どうしてそんなことがわかるの？」

「だれでも知つてゐるよ。知らないのはあんただけだ」

私はあれこれ考えながら正直なシャロンを見た。シャロンは従来人のことをとやかく言つたことはなかつた。彼がそんなふうに言うには彼なりの訳があるに違ひなかつた。

牛乳を買つて人に誤解されてからは、恥ずかしくてしばらく軍營へ買物に行く勇気がなかつた。随分たつてから、町で酒保の雜役兵に会つた。彼の口から彼らの隊では私がどつかへ行つたと思つて近づいて來た。私は唇をかみしめ緊張して彼をみつめた。彼は私に向かつて会釈をすると言つた。「ここにちは！」そしてカウンターへ行つた。

あれほどサハラウイを嫌う人を、私は「人種差別」と解釈し、もう関わり合う気はなかつた。彼のそばに立つていたが、もつぱら雜役兵に必要な品物を言い、もう彼の方は見なかつた。

お金を払う時、隣にいたその軍曹の袖をまくつた腕に、なんと大きな入れ墨が彫られているのに気がついた。濃いブルーの俗っぽいハートの下に、横一列中サイズの文字が彫られていた――「オーストリアのドンファン」

とても不思議に思つた。もともと入れ墨のハートの下にあるのは必ず女の名前だと思っていたのに、それが男の名前とは……

「ねえ！『オーストリアのドンファン』って誰なの？ どういう意味？」

その軍曹が立ち去ると、私はすぐカウンターの雑役兵に聞いた。

「ああ、あれは砂漠軍団の以前あつた軍營区の名前だよ」

「人の名前じやないの？」

「うん、カルロス一世の頃にいた人の名前さ。その頃オーストリアとスペインはまだ分割されていなかつた。その後軍団はこの名前をある軍營区の呼称に使つたんだ。随分昔の話さ」

「でも、さつきのあの軍曹はその名前を腕に彫つてたわ」

私は合点がいかぬまま、おつりを受け取ると、酒保の門を出た。

思いがけないことに、門口での軍曹が待つてた。私を目にすると、ちょっと頭をさげ、私について大またで数歩歩くと、はじめて口を利いた。「あの晩はあなたと主人に、世話になつて」

「なんのこと？」訳がわからなかつた。

「お二人に送つていただいて。酔つぱらつて……」

「ああ！ だいぶ前のことね！」おかしな人だ。もう忘れてしまつたような事に、突然お礼を言つたりして。この前送つてくれた時どうして言わなかつたのだろう？

「お聞きしたいわ。なぜサハラウイたちは、あなたがサハラウイを憎んでいふと噂しているのですか？」私は軽率にも聞いた。

「恨んでいる」彼はじろりと私を見つめた。かくもあからさまに答えるのを聞いて私はやはり驚いた。「世の中には良い人も悪い人もいるけど、その民族が特に悪いってことはないわ」私はだれもが言うようなことを単純に口にした。

軍曹は砂地に群れになつてうずくまつてゐるサハラウイにさつと視線を走らせたが、その人を射るような目つきはまたひときわ恐ろしかつた。まるでどうしようもない憎しみの炎に焼かれているかのようであつとした。私は自分のくだらない話をやめ、呆然と彼を見つめていた。

彼は数秒後はつと我にかえつたように、私に向かつて丁寧に頭を下げる。さつさと立ち去つた。入れ墨をしたその軍曹は、やはり名を告げなかつた。腕には確かにある軍營区の完全な名前が彫られていたが、なぜそんな昔の軍營区なのか。

ある日、サハラウイの友達のアリに招かれて、本セといつしょに町から百キロあまり離れた所へ行つた。彼の父親はそこの大きなテントに住んでいたが、アリは町でタクシーの運転手をしていたので、週末にしか両親に会いに帰れなかつた。

両親が住んでいたところは「メサイヤ」と呼ばれていた。はるか大昔は大きな河が流れていたのだろう。それが干上がつて両岸は大峡谷を思わせる断崖となつてゐた。その間の河床にあたる部分に、数本のやしの樹が生え、水が絶えず湧き出している泉があつた。きわめて小さな砂漠のオアシスだ。そんな広々とした場所で、また良い淡水もあるのに、どうしてわずか数個のテントに人が住んでいるだけなのかとても不思議に思つた。

夕暮れ時の涼しい風に吹かれて、私たちはアリの父親といつしょにテントの外に座つてゐた。老人

はゆつたりと長いきせるを吸つており、赤い断崖が夕焼けの中で雄壮な眺めを呈し、空にはいちばん星がぽつんと姿を現わした。

私は指先で「クスクス」をこねて、灰色のだんごにして口に入れた。そのような風景のもとでは、地べたに腰を下ろし、砂漠の民の食べ物を味わうのがふさわしかった。

「こんな良いところに、泉もあるのに、どうしてほとんど人が住んでいないの?」不思議に思い、老いた父親に聞いた。

「昔はにぎやかだったよ。だからこそ、この地は『メサイヤ』という名で呼ばれていた。あのむごたらしい事件が起こった後は、以前から住んでいた者はみな去つて行き、新しい者は当然来ようとはしない。今じや俺たちわずか数家族が、ここにへばりついているだけになつた」

「むごたらしい事件つて? 聞いたことないわ。ラクダが伝染病で死んだの?」老人に聞きただした。老人は私に目を向け、ゆっくりときせるを吸うと、急に虚ろな表情になつて遠くの方に視線を移した。

「殺したんだ! 人を殺したんだよ! 一面血に染まり、当時この泉の水もだれももう飲もうとはしなかつた」

「だれがだれを殺したの? どういうことなの?」私は思わずホセのほうににじり寄つた。老人の声はひどく神秘的で恐ろしく、あたりは、突然闇につつまれた。

「サハラウイが砂漠軍団の人間を殺したんだ」老人は低い声で言いながら、ホセと私を見やつた。

「十六年前、『メサイヤ』は美しいオアシスだった。そこには、小麦さえ育つた。ナツメヤシの実がそこいらじゅういっぱいに落ち、飲み水はいくらでもあつた。サハラウイはほとんど皆ここへラクダやヤギを追つて来て放牧した。テントの数はおびただしい数にのぼつた――」

老人が過去の賑わいを切々と訴えるのを聞きながら、私はわずかに残る数本のヤシの木を眺め、この干からびた土地にも青春があつたということがほとんど信じられなかつた。

「その後スペインの砂漠軍団も進駐して來た。そしてここに宿営して、去ろうとはしなかつた――」老人の話は続いた。

「でも、その頃のサハラ砂漠はだれのものでもなかつたから、だれが来ようとも法を犯したことにはならないでしよう」私は口を挟んで老人の話を中断した。

「そうだ。続きを聞きなさい――」老人はさえぎるような手つきをした。

「砂漠軍団がやつて來たが、サハラウイは彼らに水を使うことを許さなかつた。そのため双方で水をめぐつて、しばしば争いが起こつた。その後――」

老人が口をつぐんだので、私はせつかちに聞いた。「それからどうなつたの?」

「その後、サハラウイは徒党を組んで兵舎に奇襲をかけた。砂漠軍団のすべての人間が、一夜のうちに眠つてゐる間に皆殺しにされた。ことごとく刀で切り殺されたのだ」

私は目を見開き、火の向こうに座つてゐる老人を見つめ、声をひそめて聞いた。「みんな殺されつて言うの? 全軍営の人間が一人残らずサハラウイに刀で殺されたつて?」

「軍曹が一人だけ残つた。そいつはその晩酒に酔つて、軍営の外で寝込んでいた。目が覚めると仲間

はみんな死んでいたのだ。一人残らずね」

「その時あなたはここに住んでいたの？」私はもう少しで聞くところだった。「その時あなたはその人殺しに加わったの？」

「砂漠軍団は最高に機敏な軍団だ。そんなことができたって？」ホセが言つた。

「予測できなかつたんだ。みんな屋間の活動でへとへとに疲れていたし、歩哨に立つ衛兵の数も少なかつた。サハラウイが刀を持つて襲つて来るなど、夢にも思わなかつた」

「軍団はその時どこに宿営してたの？」

「ちょうどあのあたりだ！」

老人は泉の上の方を指さした。そこには砂地が広がつてゐるだけで、人が住んだという痕跡はいささかもなかつた。

「その時以来、だれもここに住もうとはしなくなつた。人殺しをした奴たちは勿論逃げて行つた。美しいオアシスはこんなぐあいに荒れ果ててしまつたのだ」

老人はうつむいてきせるを吸つた。日はすっかり暮れて、激しい風が突然吹き渡つて來た。ヒュー

ヒューと泣くような音も入り混じり、ヤシの樹は揺れ、テントの支柱もガタガタときしみだした。

私は顔を上げ闇の中のかなた、十六年前砂漠軍団が宿営していたあたりを見ていた。軍服を着たスペイン兵がいく手にも分れて頭を布で覆い刀を振り上げたサハラウイと白兵戦を演じてゐるのが見えるような気がした。兵隊たちのひとりひとりがまるで映画のスローモーションのように次々と刀の下に倒れていつた。おり重なつた兵士たちは血を流しながら砂の上を這つており、千にものぼる虚しく

救いを求める手が天に向かつて伸ばされ、声にはならぬ叫び声が血にまみれたどの顔からもほとばしつついた。闇の中を吹き渡る風の中を、死のうつろな笑い声が寂しい大地の上に響きわたつてゐた。

驚いた私は力を込めてぐつと瞬きをすると、すべてが消え去り、あたりはもとのまま平穏で静かで、火を囲んで座つたホセと私、そして他の人たちも、だれひとり口を利く者はなかつた。

私は突然寒けを覚え、胸がふさがつた。これは単に老人の言うような殺人事件なんかじゃない。残酷まる大量虐殺なのだ！

「その唯一生き残つた軍曹というのは——つまりあの腕に入れ墨をした、いつも狼のような目でサハラウイをにらんでいるあの人なの？」私はそつと聞いた。

「あいつらはずつと堅く團結した仲の良い軍営だつた。今でも覚えてゐるよ。あの軍曹が酔いから醒めて、死んだ兄弟のしかばねに狂つたように抱きついて震えていた姿を」

私は突然あの軍曹が腕に軍営の名を彫つてゐたのを思い出した。

「あの人名前を知つてる？」

「あの事件の後、あいつは町の軍営団へ編入された。その時以来、自分の名を言わない。あいつが言ふには、軍営の兄弟が全部死んでしまつたのに、自分に名前なんかあるものかつて。皆はあいつのことを軍曹とのみ呼んでいる」

過ぎ去つてずいぶんたつた古いことなのに、思い出すとやはり恐ろしくて鳥肌が立つた。遠くの砂地がうごめくような気がした。

「さあ、寝るとするか！」日が暮れたよ」ホセがわざと元気な大声を上げた。それから黙つたまま、

テントの中にもぐり込んだ。

そのことはすでに歴史上の悲劇となつており、町で人の口にのぼることはほとんどなかつたが、私はその軍曹を見かけるたびに、いつも動悸を覚えた。そんな痛ましい記憶は、いつになつたら彼の心の中で薄らぐのだろうか？

去年（一九七五年）の今頃から、この世界の人々に忘れられていた砂漠は突然複雑なことになつてきた。北のモロッコと南のモーリタニアがスペイン領サハラを分割しようとしており、一方、砂漠の住民サハラウイはゲリラ隊を組織して本部はアルジェリアに逃れていた。彼らは独立を要求していたが、スペイン政府は去就が定まらず、態度はあいまいで、この長年にわたつて心血を注いできた属領から手を引くべきかそれとも守るべきか、決断はみられなかつた。

その頃、スペインの兵士は単独で外出すると殺され、深い井戸に毒薬が投げ込まれ、小学校のスクールバスからは時限爆弾が発見された。燐鉱石の会社の輸送ベルトに放火され、夜警員が電線に吊るされて死んでいた。町の外の道路では通りかかった車が地雷を踏んで爆破された――

うち続く騒乱のため、町中が恐れおののいており、政府は直ちに学校を閉鎖し、子供たちをスペインへ疎開させた。夜間は全面的に戒厳令が敷かれ、町には次々と戦車が入り込み、軍事機関の建物には何重にも鉄条網が張り巡らされた。恐ろしいのは、国境線上スペイン領は三面敵に囲まれていたので、小さな町では、それらの騒乱が

どういう側から引き起こされたものかわからぬことだつた。

そんな状況のもとで、女や子供はほとんどすぐにスペインへ帰ろうとしていた。ホセと私は世話を焼く家族もいなかつたので、様子を見ることにして動かなかつた。彼はいつも通りに出勤し、私は家にいた。普段は手紙を出しに行つたり食事の買物に行くほかは、公共の場所は爆破の恐れがあるので、もうめつたに外出しなかつた。

ずっと静かだった町に、家具の安売りを始める人が出てきた。航空会社の入口には、毎日チケットを買い争う人々の長蛇の列が並んだ。映画館、商店はどこも店を閉め、駐在するスペインの公務員すべてにピストルが支給された。空気はみように緊張しており、まだなんら戦争となる正面的な衝突は起こつてはいないその小さな町は、すでに混乱と不安の中にいた。

ある日の午後、その日のスペインの新聞を買うために町へ行つた。政府がこの土地をいつたいどうするつもりなのか知りたかったが、新聞にはその事はなにも書かれておらず、毎日あいも変わらぬ内容だつた。鬱陶しい気分でぶらぶらと家の方に歩いていると、途中棺桶をいっぱい積んだ軍用トラックが墓場の方へ走つて行くのが目に入つた。国境ではすでにモロッコ人との戦いが始まつてゐるかと思ひ驚いた。

家へ帰る道は、必ず墓場を通り抜けて行く。サハラウイは二カ所自分たちの大きな墓地を持つていたが、砂漠軍団の共同墓地はまつ白な柵で囲まれており、模様を彫つた一枚の黒い鉄の扉が閉まつていた。塀の中には何列にも十字架が並んで立つており、十字架の下にはそれぞれ平らな石板が敷かれて墓となつていた。

私が通り過ぎる時、墓地の鉄の扉は開いており、すでに一列めの石板の下の墓が掘り起こされていた。大勢の砂漠軍団の兵士たちがひとつひとつ、死んだ兄弟たちを運び出し、新しい棺桶に納めているのだ！

その情景を見た瞬間、私はスペイン政府が長々と宣言をこばんできた決定をただちに悟った。砂漠軍団は生きる者は砂漠に生き、死ねば砂漠に埋葬されるという兵士だ。今彼らは自分たちの死人さえも掘り起こして一緒に連れ帰ろうとしていた。ということは、スペインは結局この土地を放棄しようとしているのだ！

恐ろしかったのは、ひとつひとつの死体が、死後何年もたつというのに、乾燥した砂の中から掘り起こすと、ひと塊の白骨ではなく、ひとつひとつミイラのようにならびた死体だったことだ。

軍団の人々は死体を注意深く持ち出し、照りつける太陽のもと、そつと新しい棺桶に納め、釘を打ち、字を書いた紙を貼り、それから車に積み込んだ。

棺桶を運び出すために、見物に集まっていた人々は道を開けたので、私は墓地の中まで押されて行った。その時、はじめてあの名のない軍曹が扉のかけに座っているのに気がついた。

私は死体を見てあまり動搖しなかつたが、ただ棺桶に釘を打つ音はたまらなかつた。突然その時軍曹を目にし、あの夜酒に酔つて地べたに転がつていた様子を思い出した。あの夜もやはりこの墓場の近くだつた。ずいぶん昔の惨事なのに、彼の凄惨な記憶はいまなお薄れていないのだ。

三列めの石板が開かれた時、軍曹は待ちかねたように立ち上がり、大股で歩いて行くと、穴の中に飛び下りた。その手で腐乱のない死体をまるで恋人を抱くかのように抱き上げ、そつと腕の中に横た

えると、静かにその干乾びた顔をみつめていた。彼の表情には恨みも怒りもなかつた。私に感じられたのはただ穏やかともいえるような哀しみだけだつた。

皆は軍曹が死体を棺に納めるのを待つていた。彼は、強烈な陽ざしの下に、この世を忘れてしまつたかのように立つていた。

「弟だよ。あの時、皆殺しにされた」一人の兵士が、十字鍬を持ったもう一人の兵士に小声で言つた。

随分長いことたつて、軍曹はやつと棺桶に向かつて歩き出した。死んで十六年になる肉親を、赤ん坊をあやすようにそつと永遠の眠りの床に横たえた。

軍曹が門を出て行く時、私は視線をそらした。私のことを平気で見物している物好きだと思つて欲しくなかつた。寄り集まつたサハラウイの野次馬の中を通り過ぎる時、彼は突然足を止めた。サハラウイたちは子供の手を引いて散り散りになつて逃げた。

一列ずつ並べられた棺桶は飛行場へ運ばれ、地下に眠つていた兄弟たちは先に連れて行かれた。果然と並んだ十字架だけが残され、太陽の下でまぶしく白く光つていた。

その朝、ホセは早番だったので、五時半に家を出なければならなかつた。時局はかなり厳しくなつていたので、私はその日砂漠から小包をいくつか送り出すため、車が必要だつた。それでホセは送迎バスで出勤し、私に車を残してくれることになつていて。だが私は早朝やはり車でホセをバスの乗り場まで送つた。

帰り道、地雷が恐ろしかつたので、いつさい近道はせず、アスフルートの道路の上だけを走つた。

町に入る坂道で、燃料メータがゼロになつてゐることに気がついた。ついでにガソリンスタンドに寄つて行こうと思い、時計を見たが、まだ六時十分前だつた。スタンドはまだ開いていないので、方向を転換し家に帰ろうとした。ちょうどその時すぐ近くの町の大通りから、突然ドーンとひどく大きな爆発音が轟き、続いてまつ黒な煙がもくもくと空に上がつた。あまり近くだったので、その時私は車の中にいたのに、びっくりして胸が早鐘のように鳴つた。すぐに家にむかつて車を走らせるとき、町の救急車がサイレンを鳴らしながら、飛ぶように走つて行く音が聞えた。午後になつて帰つて来たホセは私に聞いた。「爆発音を聞いたかい？」

私はうなずいて答えた。「怪我人が出たの？」

ホセは突然言つた。「あの軍曹が死んだ」

「沙漠軍団の、あの？」他の軍曹のはゞがないことはわかっていた。「どうして死んだの？」

「彼は朝早く車を運転して爆発したところを通りかかつたんだ。ちょうどそこでサハラウイの子供たちが箱を玩具にして遊んでいた。箱の上にはゲリラ隊の小さな布の旗が挿してあつた。軍曹は多分その箱がおかしいと思ったのだろう。車を降りると子供たちの所へ駆けより、箱から遠ざけようとした。だが、子供の中のひとりが旗を抜いた。箱は突然爆発した——」

「サハラウイの子供たちが何人死んだの？」

「軍曹の身体が、先を越して箱の上に覆いかぶさつた。あいつはばらばらになつたが、子供たちは二人が怪我をしただけだ」

私は呆然としたままホセの食事の支度を始めた。頭の中ではずっと早朝の出来事を考えていた。十

六年もの間恨みに取りつかれてきた人が、最大の危機に瀕した時、自らの生命を投げうつてその死と引き換えに、長年かたきと恨んできたサハラウイの子供の生命を救つた。なぜ？　まさか彼がこのようない死を迎えるとは思いもよらなかつた。

翌日、軍曹の死体は、棺に納められ、空っぽになつた共同墓地に静かに埋葬された。彼の兄弟たちはすでにそこを去り、別の土地で安らかに眠つてゐる。だが彼は、ともに行くには間にあわず、静かにサハラの大地に埋葬された。彼が愛し憎んだその土地は彼の永遠の故郷となつた。

彼の墓碑は簡単だつた。私はういぶんたつてから中へ入つて見たが、碑にはこう刻まれていた——

「サバ・サンチエス・ダリ、1932-1975」

帰り道、サハラウイの子供たちが広場でごみ桶を手で叩きながら、リズミカルな歌を歌つていた。夕日の中で、それはえも言われぬ平和な光景で、まもなく戦争が始まろうとすることなど知らぬかのようと思われた。